

第24回日本保健医療行動科学会学術大会の開催にあたって

大会長 谷口文章（甲南大学）

第24回日本保健医療行動科学会学術大会を、6月27日(土)～28日(日)にかけて、「ヘルスケアの現在と未来—気づきと行動変容のために—」のテーマのもと、甲南大学におきまして開催致します。

初日の27日(土)に、一般演題・口答発表、基調講演「ヘルスケアと医療倫理」谷口文章、体験学習ワークショップ①サイモン療法(田村祐樹氏)、②ナラティブ・アプローチ(中川 晶氏)、③アロマセラピー(相原由花氏)、④ミュージックセラピー(石井豊子氏)、懇親会を予定しております。

二日目の28日(日)は、一般演題口頭発表、ポスター発表・討論、高木慶子氏の特別講演「日本におけるグリーフケアの課題」があります。さらに、シンポジウム「気づきと行動変容のために」のテーマで、「ホスピスケア—生きぬくための支援—」内藤いづみ氏、「グリーフケア—悲しみに寄り添う—」坂口幸弘氏、「ここはegaoになれたかな?—小児科ボランティア活動における気づき—」神田美子氏、「笑いとケア—笑いの治癒力—」西松央一氏の各先生方をパネリストでお招きしております。

今日、「ケア」は医療分野だけでなく、さまざまな分野において使われるキー概念の一つです。従来、主として社会福祉や障害者の福祉などの分野において使用されてきましたが、最近では地球環境に対する「ケア」とさえいわれるようになりました。つまり、人間の使命として、生態系を生命体としてあつかい「健全な」自然環境を守るためのケアやスチュワードシップを実践していく必要性が指摘されるようになってきています。

他方、「ヘルス」については、主として生命体をホリスティックな観点からみたときの「健やかさ well-being」を表わすものといえましょう。たとえば、アンドリュー・ワイル『癒す心、治る力』によると、①からだは健康になりたがっている、②治癒は自然の力である、③からだはひとつの全体であり、すべての部分はひとつにつながっている、④ここらからだは分離できない、⑤治癒家の信念が患者の治癒力に大きく影響することを述べています。この意味から、生命力を原点にして「ヘルス」の意味を改めて考える時期にあるといえましょう。

したがって、ヘルスケアとは、自然治癒力の発動とその支援のために、健康(ヘルス)をめぐる生命力の“気づき”から“行動変容”へとつながる配慮(ケア)であり、それと同時にライフスタイル(生活習慣と生き方)が変わっていくことをねらいとしています。

ケアの視点からみた医療のあり方では、相手の最善をめざすとともに、相手とのコミュニケーションを通してケアを進めることが大切です。「相手の最善をめざす」とは、ケアをする側とされる側との関係、そして両者のおかれている臨床環境というケアの文脈において価値あるものをめざすことを意味します。したがって、ケアの文脈から独立してそれ自体に価値があるとされるものを端的に基準にしてはいけません。つまりケアをする側がその人にとっての最善と思われる目的を一方的に決めてしまう、つまり医学や医療が一方的に決めてしまっはいけないでしょう。たとえば、「患者の生命をできるかぎり維持する」という場合、それ自体が独立した価値としてとらえられるならば、延命の努力が施され患者の苦しみをいわずらに長引かせる結果になることもあります。もちろん患者の主観的な思いによる期待感だけでも陥穽に落ちることがあります。ケアをする側・される側の両者において、患者にとってのQOLがどのような意味や価値をもつものか、その人の人生観や世界観の文脈にそって判断することが大切となります。

したがって一般的に価値があり、よいことだと思われることも、「相手とのコミュニケーション」を通してケアの文脈を理解することが必要です。それは、相手の最善をめざし相手とのコミュニケーションを通して、治療方針の決定が患者との“共同の合意”のもとに行なわれるものでしょう。一方で、患者から独立して医療従事者の最善と思う治療だけに偏ることなく、他方で、患者の現実の希望だけでなく、両者による基本的価値観を共有して、ケアの文脈に沿いながら、最善のケアなのかどうかを考慮した判断となるでしょう。

こうして、ケアする側とケアされる側との文脈の共有と共同決定が行なわれる臨床環境において、ケアの倫理の枠組みが生じることになると考えられます。このようなヘルスケアの共通の文脈を探りあててを、本大会の趣旨にたく予定しております。今大会では、多様な分野で先駆的なご活躍をされておられる先生方をお招き致しました。

初夏の神戸にて、会員の皆様のご発表ならびにご参加を心よりお待ちしております。ぜひ奮ってご来場ください。